

## 松野殿御返事

魚の子は多けれども魚となるは少なく、菴羅樹（あんらじゅ）の花は多くさけども菓になるは少なし。人も又此くの如し。菩提心を発こす人は多けれども退せずして実（まこと）の道に入る者は少なし。都（すべ）て凡夫の菩提心は多く悪縁にたぼらかされ、事にふれて移りやすき物なり。鎧（よろい）を著たる兵者（つわもの）は多けれども、戦（いくさ）に恐れをなさざるは少なきが如し。

（御書1048～9頁）

### 【通釈】

魚の子は多いが成魚となるものは少なく、菴羅樹の花は多く咲くが果実となるものは少ない。人もまた同様である。菩提心を発す人は多いが、退転せずに真実（成仏）の道に入る者は少ない。総じて凡夫の菩提心は、多く悪縁にたぼらかされ、物事に触れて移りやすいものである。それは、鎧をつけた兵士は多いけれども、戦いに恐れをなさない者は少ないようなものである。

### 【主な語句の解説】

- ・菴羅樹→マンゴー樹のこと。『玄応音義』には「この果、花多くして子を結ぶこと甚だ少なし」とあり、仏道成就の難しさを譬える。
- ・菩提心→悟りを求める心。爾前経では煩惱を断じて菩提を得るとされたが、法華経では妙法を受持することによって、煩惱を断ずることなく菩提を得ると説く。
- ・悪縁→悪い結果を引き起こす間接的な原因。大聖人の教えでは、悪縁に遭っても、それを機として信心修行に励むならば、変毒為薬して悪縁も善縁へと変えることができるとされている。

### 【背景と大意】

本抄は、身延入山の二年半後、建治二（一二七六）年十二月九日、大聖人御年五十五歳の時に、弟子の三位房を使いとして、庵原郡松野（現・富士市）の郷主松野六郎左衛門に与えられたお手紙です。この書は、その内容から『十四誹謗抄』とも称されています。本抄において、松野殿からの「聖人のお唱えになる題目と、我等の唱える題目とでは、功德に多少の違いがあるのでしょうか」（御書一〇四六取意）との質問に対し、大聖人はまず「勝劣あるべからず」（同）と答えられています。その上で、もし功德の差があるとすれば、それはひとえに「十四誹謗」があるかないかによる、と御教示されています。

拝読の御文では、妙法の信仰心を発す者は多いが信心を貫き通して成仏する者が少ないことを示され、悪縁に決して紛動されることなく、どこまでも不退転の覚悟をもって、仏道に精進するよう励まされています。

## 【参考御書並御指南】

十四誹謗 ① 憍慢＝驕り高ぶって正法を侮ること ② 懈怠(けだい)＝仏道修行を怠ること ③ 計我(けが)＝自分勝手な考えで仏法を推し量ること ④ 浅識＝浅はかな知識で正法を判断し、深く求めないこと ⑤ 著欲＝欲望に執着して正法を軽んじること ⑥ 不解＝正法を理解しようとしなないこと ⑦ 不信＝正法を信じないこと ⑧ 顰蹙(ひんじゅく)＝顔をしかめ正法を非難すること ⑨ 疑惑＝正法を疑うこと ⑩ 誹謗＝正法を謗ること ⑪ 輕善(きょうぜん)＝正法を受持する者を輕蔑すること ⑫ 憎善＝正法を受持する者を憎むこと ⑬ 嫉善＝正法を受持する者を嫉むこと ⑭ 恨善＝正法を受持する者を恨む

松野殿御返事「余念なく南無妙法蓮華經と御唱へありて、僧をも供養し給ふが肝心にて候なり。それも經文の如くならば随力演説も有るべきか」 (御書一〇五一)

## 日如上人御指南

『南条兵衛七郎殿御書』には、「信心ふかき者も法華經のかたきをばせめず。いかなる大善をつくり、法華經を千万部書写し、一念三千の觀道を得たる人なりとも、法華經のかたきをだにもせめざれば得道ありがたし」(御書三二二)と仰せられているのであります。私どもはこの御金言を拝し、私どもの信心にとっていかに折伏が大事であるかを肝に銘じて、「力あらば一文一句なりともかたらせ給ふべし」(同六六八)との御金言を胸に、一意専心、折伏に励んでいくことが一生成仏のためには最も肝要であります。 (大日蓮・平成31年2月号)